

U-18 シアタープロジェクト スペシャル対談

監修・演出：宮田 慶子

×

北口 麻賀

作者：吉田 はるか

鳥取県内のU-18(18歳以下)の若者が書いた戯曲を、同じくU-18の若者が演じるメッセージ性の高い演劇公演を目指し、2017年3月より始動した「U-18シアタープロジェクト」。

戯曲の創作には、“主張したいことや普段疑問に思っていることを、作品に乗せて社会に投げかけてみたい”という5名の若者が挑みました。講師指導のもと、1人の脱落者もなく、約1年の時間をかけて新作戯曲5本が完成。

その作品の中から選ばれた2作品『ant』『動かない電車に乗って』を、オーディションを経て選ばれた鳥取県在住のU-18の若者と、両作品に客演を迎え、ともに作品を創り上げていきます。

そしてプロジェクトの最終ステージを迎えている中、『ant』の作者・北口麻賀さんと、『動かない電車に乗って』の作者・吉田はるかさん、そして監修・演出の宮田慶子さんに話を伺いました。

◆U-18の若者が挑んだ戯曲創作

— 今回の作品は、なぜこのテーマにしたのか、そこにどう言う思いを込めたのかお聞かせください。

北口麻賀さん(以下、北口) この戯曲を書くにあたって、講師の大和屋先生から「社会に訴えたいテーマがありますか？」と聞かれた時に、私が一番に思いついたのがいじめ問題でした。実は私も中学時代にいじめを受けていたことがあり、いじめの辛さは身をもって知っています。いじめに関わったことがない人にとっては、この問題をフィクションに感じることもあるのではないかと気が付き、このプロジェクトを通じて世の中の人に少しでも訴えることができたらと思ったんです。

— では、この作品にはご自分の実体験を反映させた部分があるのでしょうか？

北口 作品の主人公は“アント”というあだ名で呼ばれているのですが、人を傷つけるようなあだ名をつけるというのもいじめの一つで、私にもその経験がありました。そこは反映しました。

— 吉田はるかさんはいかがですか？

吉田はるかさん(以下、吉田) テーマを考える際に、頭の中に、動かない電車という場所のイメージが先にありました。その中には誰がいるんだろうとか、何でそこにいるんだろうということを考え出した結果、今回の話が出来上がりました。

私自身高校生になってから、この先どうしたらいいんだろうとか、上手くいかないことをどう解決したらいいんだろうという体験があり、どうやって先に進んだらいいかわからない、八方塞がりな状況が作品のイメージを産んだのだと思っています。

その状況から出ていくということは決心がいることですし、自分の中で言い訳してしまいたいことや、前に進んでいけないけど前に進んでいきたいという気持ちの葛藤が作品に影響したのだと思います。作品が自分の手から離れて冷静に考えられるようになった今、気づきました。

宮田慶子さん(以下、宮田) 魅力的なタイトルですよ。『ant』もそうですけど、よく考えられています。

— 宮田さんはお二人の作品を読んでどうお感じになりましたか？

宮田 作品が段々と完成していく工程もずっと付き合っ読ませて頂いていたので、出来上がった時にはお二人と同じように感無量でしたね。最終的に両作品とも本当によく書けていると思います。彼女たちがそれぞれ意識してこういう事を書きたかったんだという創作意図や、書きながら後で気付いたこと、そしてまた、端々に彼女たちが意識してか意識してないのか、ふっと書いてしまっているとても怖い部分や、世の中に対する想いや、自分に対するもどかしさなんかを感じます。それがいろんな所に散りばめられていて、それは、本当に時間をかけて書かれたからこそだと思いますし、そういう意味ではとても密度が濃いですよね。

なので、完成して読んだ時には「うわー！すごいものが出来上がったなー！」って思いましたよ！もちろん私は普段大人の書いた台本ばかり手掛けているわけですが、全然プロと遜色ないよ！頑張った！これからも頑張れ！という思いです。

— この年代だからこそ書けるという所はありますか？

宮田 もちろんありますね。ですので、私のように歳を重ねた人間が演出をする時に、そこは気をつけなきゃいけないなと感じています。私の、大人の感性ではもしかしたら見落とすところがあるかもしれないと、かえって非常に慎重に進めていきたいなと思っています。

— そういう意味では宮田さんも若者から刺激を受けられているんですね。

宮田 すごく受けています。面白いですよ。

◆同じ目的に向かい、集ったU-18の若者たち

— 作者のお二人は、ご自身の想いや体験を反映されて戯曲を書かれたということですが、作品を通じて表現したことによって、これまでの辛い経験が癒されたり、自分の中で捉え方が変わったり、テーマに対する思いが変わったりなど発奮されたところはありますか？

北口 私のいじめに関しては、高校になって学校が変わったことで過去のこととして考えられているので、表現することで何か変わったということは実はあまり感じていません。

— 高校になって区切りがついたからこそ書けたのでしょうか？

北口 それはあります。この作品(『ant』)の中にも、いじめを受けていた“安藤たくみ”という少年が出てきます。いじめを受けている時は、主観的になって周りが見えなくなってしまうと思うので、今だからこそ体験を客観的に見られたことで書くことができたと思います。

今回は蟻を題材に使っています。私にとって蟻には、結構強いイメージがあります。蟻は小さいけど自分より大きなものを軽々と運んだり、体に硬い皮膚を持っていて潰れにくいところもあるんです。確かに人間からすると、すぐ潰れる弱い虫だけど、蟻は蟻でその強さがあります。いじめられている方は、いじめている人たちからすればすぐ潰れる弱い存在ですが、彼らなりの強さがあると思います。そこを感じて受け止めてもらえたらいいかなと考えられるようになりました。

— 吉田さんはいかがでしょう？

吉田 『動かない電車に乗って』は、大人の男性が多い作品なんですが、私みたいな18歳の少年少女ではなくても、大人でも、身動きが取れず動きたいけど動けない状況になり得ることもあると思うんです。そういう苦しみみたいなものをたくさんのいろんな年代の方に見ていただける機会ですので、大きな表現かもしれないですけども、この作品を通して「あー私もこういうところあるな」と共有していただき、みんなそれぞれの孤独な部分を緩和できたらいいかなと思っています。

— ご自分も今はそこから抜け出せているような状況ですか？

吉田 そうですね。抜けたのかなという感じはしています。今回のプロジェクトに手助けをしていただいたな一つという部分があります。「戯曲創作講座」の受講生5人みんながそれぞれに頑張っていましたし、講座の休憩中にみんなでチョコレートを食べながら意見交換しているだけでも、私にとっては非日常の出来事だったので、色々な事を忘れられる時間でもありました。少しでも気持ちを前に向かせてくれるような時間でしたね。

— 書くことによって気持ちを前に向かせることができたんですね。

吉田 手助けは本当にしてもらいましたし、何より本当に楽しかったです。

北口 私も過去にいじめを受けていたのが基本的には男子だったので、今でも同年代の男子がすごく苦手で、コンプレックスがあったんです。今通っている学校では男子がすごく少なく、クラスの38人中男子3人とかが普通なのであまり気にしていなかったんですけど、講座の受講生は5人中2人が男子だったんです。

宮田 タイプの違う、面白い2人だったね(笑)

北口 そうなんです。男子はみんな敵だと思っていたんですが、実際話してみると二人ともとても優しく、普通に話してくれたのが嬉しかったですね。男子の見方が少し変わったかなって部分があります(笑)

宮田 あの二人が男子代表で良かったのかもね(笑)

— 今回の講座に参加したことによって前進された部分があったんですね。

北口 そうですね。

宮田 変なこだわりとかなく、ちゃんとお互いの仕事を尊重し合って、仕事の進め方を楽しみながら、心配し合いながら進んでいたよね。本当に良いメンバーだったんじゃないかなと思います。

吉田 お互い良いアイデアなんか出し合ったりしていましたしね。自分では思ってもみないようなアイデアを出し合い創りあげられたのは大きかったですね。

◆ 戯曲に込めたU-18の想い

— ちょっと話が大きくなりますが、お二人から見て「現代社会」というテーマに対して今回の作品を通して何か伝えられることがありますか。

北口 いじめの経験を通して、人はどこかしらで誰かを見下さないと生きていけないものなのかなと感じています。いじめる側はいじめる相手のことが嫌いなはずなのに、すごく執着してくるんです。好きなのかってくらい執着して必死に観察して欠点を探ってくるんですよ。それって大人の世界にもあると思います。

— 大人の社会で言うとパワーハラスメントとかですね。

北口 男女間でもあると思いますし。この作品の蟻というのは誰にでも、人が誰かを見下している象徴の一つになっています。

吉田 私の作品は、講師から原発問題を思い起こさせるよねという話がありましたが、そこに関しては無意識な所でした。電車の中に閉じこもっている状態、要するに心の殻に閉じこもっていることって誰にでもあり得ることだと思うのですが、そこから前を向いて出てきた人、身動きが取れずにそこに立ち止まっている人、いろんな人がいる中で、今の社会は人を責めすぎる傾向があるように感じていたんです。一度失敗したら、楽しい思いをしてはいけない、幸せになっちゃダメだろうぐらいの風潮があるように思います。一生責められなければならないのかなと思うことがすごくあって、やってしまったことや失敗してしまったことに対して反省したりすることは、もちろん大事だと思っています。ですが、反省する意味というのは、そこからさらに頑張っていくため、新しいことにチャレンジするためあって、その人が不幸じゃなきゃいけないとは思わないし、どういう人でもどういう経緯を辿ってきた人でも、次に進んでもいいじゃないかと、普段からニュースなどを見ながらそんなことを考えていたんです。

— 確かに最近ではみんなでことん叩くという風潮がありますね。

吉田 『ant』の作品でいうところの、人を見下すではないけれども、あの人あんな悪いことをしたらしいぞってなったら、寄ってたかって人が群がるようなニュースを見ていると悲しくなるんです。

北口 確かに、みんな誰かしら責める対象というか、マウントを取りたい気持ちはどこかにあるような気がしています。自分より悪い人、責めていい対象を見つけると群がって見下し責め立てる。そうやって責めることによってその人の人生が終ることで、自分が勝ち組になりたいところがあるのではないのでしょうか。

吉田 「動かない電車に乗って」は重いテーマを扱ってしまっていて、この作品を見てやっぱり悪い事をしたら許されてはいけないよね、で終わってほしくなくて。犯してしまった罪、失敗してしまった面だけではなくて、もっと違う一面を見せられたらいいなと意識して書きました。

— 宮田さんは演出を務められますが、この 2 作品をどのように創り上げられるのでしょうか？

宮田 そうですね。まずは、今本当に良い話を伺えましたので、改めて気を引き締めて、とにかく彼女たちのこの想い、作品に込められているものを大事に立ち上げていきたいなと思っています。それには、俳優も具体的に作品を理解をして、そのために演技をするんだと自覚してもらい、一つ一つ稽古を積んでいく作業になります。本当に稽古って地道に小さなコマを一つずつ積み上げていって、巨大なモニュメントを作るみたいな話なので、その作業をひたすら丁寧にやってきたいと改めて思いますね。

二人とも本当にしっかりしているし、今言われたように大人の世界は今まで誰かを責めるところで終わってしまっていたわけで、ネットでは炎上して潰れたね、で済んでしまっていますが、本来はそんなこと言えないですよ。原発の問題ではないですけども、社会全体で大きな過ちを犯している事もあるわけで、そこからどうやって先へ進むのかっていうのは、自分達で自分達に勇気を持たせないと進んでいけない社会になるんだらうな、ということをちゃんと U-18 が気が付いてくれているところが、スゴイぞっ！と思っています。これに対して、大人がある意味いい示唆をもらうんじゃないかなと思いますね。

いじめのことに關しても、当事者ではない大人達ってのはただいじめの構造があって、困ったねーと言っているだけで、決してその中身とか当事者の心の中とか、どれだけその子たち自身が客観的に、自分を見つめ、相手も見つめているのかということ意外と見落としていると思います。その辺をちゃんと言葉で舞台に乗せていけたらなあと思いますね。

いじめが悪いとか罪を犯した人が悪いといった、教条的なことで終わってしまうのもったいないですし、作家である彼女たちに申し訳ないと思うので、なんとかこれから先のテーマが見えるような舞台にしたいと思っています。

ですので、もがいているよ、今俳優たちは(笑)

— 作者のお二人はこの話を聞いて、気が引き締まるような感じがありますか？

北口 もう私たちは、本番当日まで完成を待つことしかできないですね。

宮田 怖くて稽古も見られないんじゃない？(笑)

吉田 見られないですね(笑)

宮田 俳優たちも、彼女たちと同じ U-18 なので、彼らも必死です。下は 16 歳からいますから。なんとか喰らいついてきていますよ。でも楽しんでやっていますね。演じる彼らの想いも、ちゃんと乗つけられるところまで稽古を積みたいなと思っています。与えられた台本をただこなして、セリフを言うだけじゃ、今回のプロジェクトに参加して貰ってる意味がないので、彼ら自身の考えも乗つけていくために、ひたすら稽古を積むしかないぞと。(笑)

そして何より、たくさんの人に見てもらいたいですね。特に大人にこそ見てもらいたい。大人が見て、「18 歳ってこんなこと考えてるんだ。こんなしっかりしてるんだ。」って事を認識してもらえることが一番かなと思います。

— 本当に作者のお二人の話を聞いているとしっかりしていて驚きました。

宮田 下手な 20 代 30 代よりよっぽど考えてますよ(笑) 物書きなんですねやっぱり。

吉田 実感はないですけどね。

宮田 なかなか実感できないよね。まだまだ若いからやる事やりたい事がいっぱいあると思うしね。次に何か書こうとは思わないの？

吉田 戯曲って本当に難しくて。人の動きとか感情が文字に出来ないの、身振り手振りにする難しさがあって楽しいのと同時に、「どうしたらいいの？」みたいな。あーここを書き終わったら次に進めるのにー！みたいな状態で 3 日ぐらい経っちゃうこともありました(笑)

— 今回のことをきっかけに将来は劇作家という選択肢は出来ましたか？

吉田 時々、寝る前にブワッ！と目の前に物語が広がる事があり、それを形にしようと思ってパソコンを開くんですが、やっぱり、そんな簡単に出来ないんですよね。

北口 そうなんですよ。作品を創る苦労って実際やってみないとわからないものですね。

— 物作りの苦労をひしひしと感じますね(笑)

吉田 私は小説が好きで、昔は「この作者さん早く新しい本出さないかなー。」と思ったりしていたのですが、今は1年に1冊しか出せない気持ちが分かりますね(笑)

北口 私は趣味程度ですけども、物書きは続けたいなと思っています。ひそかな夢として、趣味で書いた小説の書籍化も考えたりしています。

宮田 是非続けて書いて欲しいですね。

吉田 今回、自分の書いたものにお金を出して観ていただくという貴重な機会を頂いたことは、自分の中で本当にすごく大きなことですね。ある程度の段階を踏んで、初めてお金をもらえるような作家になるのが普通で、いきなりこの段階からは始まらないじゃないですか(笑)とっても不思議な感覚ですが、ぜひみなさんに観ていただきたいと思います。